

病理診断科

片岡 恵理 堀田真智子

伏見聡一郎

臨床検査科 和仁 洋治

【背景】当院呼吸器内科では気管支内視鏡施行時に経気管支肺生検（以下生検）や擦過細胞診（以下ブラシ）、気管支洗浄液細胞診（以下洗浄）を行っている。今回、癌細胞の検出状況について検討した。

【対象および方法】2015年8月から2018年3月までの期間に生検、ブラシ、洗浄を同時に行的、いずれかが陽性となった176例を対象とした。それぞれの陽性例を比較し、検体採取部位についても検討した。

【結果】生検、ブラシ、洗浄の全て陽性が109例、生検、ブラシのみ陽性が43例、生検のみ陽性が15例、ブラシ、洗浄のみ陽性が3例、ブラシのみ陽性が2例、洗浄のみ陽性が4例であった。全症例のうち生検陽性あるいはブラシ陽性は97.7%であった。また、検体採取部位を調べた結果、洗浄のみ陽性の4例はすべて上葉肺癌であった。

【考察】生検とブラシ併用で癌細胞の検出はほぼ可能であり、洗浄は必ずしも必要としない。洗浄併用が必要となるのは、上葉肺癌の場合と考えられる。

#### 4. がん化学療法中に生じたストーマ周囲難治性潰瘍の症例

6階東病棟

○北原 邦彦 石川 暢子

感染管理室

松本由美子

外科

河合 毅 渡邊 貴紀

【はじめに】

直腸がんで化学療法（FOLFOXIRI + ベバシズマブ）を受けた患者が、ストーマ周囲に難治性潰瘍を生じた。医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働し、化学療法を続けな

がら治癒した症例を経験したので報告する。

【症例】

60代男性 直腸癌で多発肝転移があり、回腸双孔式ストーマ造設後に、化学療法を開始した。1コース目の治療を受け退院後に、ストーマ周囲に潰瘍を生じ、緊急入院した。潰瘍は、医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働してケアを行い縮小した。入院から4週間後にFOLFOXIRIを再開し退院した。退院後は月1回のWOC外来でフォローしながら、FOLFOXIRIを継続した。発症から4か月後に潰瘍は治癒し、ベバシズマブを再開した。その後、潰瘍が再発することはなかった。

【考察】

医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働し、銀含有ハイドロファイバーを用いたケアを行うことで、創傷治癒過程に基づく感染コントロールが行えた。

#### 5. AST（抗菌薬適正使用支援チーム）による血液培養陽性例への介入効果

感染管理室 AST<sup>1</sup> 薬剤部<sup>2</sup> 同ICT<sup>3</sup> 内科<sup>4</sup>

○畑中由香子<sup>1,2</sup> 八瀬和佳恵<sup>1</sup>  
大石 博一<sup>1</sup> 明神 翔太<sup>1</sup>  
長久 剛<sup>1</sup> 久保西四郎<sup>1</sup>  
遠藤 芳克<sup>1</sup> 最所 裕司<sup>1</sup>  
邑上 達也<sup>2,3</sup> 永井美由紀<sup>2,3</sup>  
山根 裕之<sup>2</sup> 佐古亜佑美<sup>2</sup>  
玉田 智子<sup>2</sup> 石井 雅人<sup>2</sup>  
上野 聖子<sup>2</sup> 奥新 浩晃<sup>2,4</sup>

【目的】今年度2018年より院内にAST(Antimicrobial Stewardship Team)が組織された。ASが政府の薬剤耐性対策アクションプランの一方策とされる中、当院AST活動の一つとして血培陽性成人患者に対する抗菌薬使用に介入した。本活動の現状把握と評価により今後の活動に生かすことを目的とする。

【方法】2018年10～11月で血培陽性例のAS指標（抗菌薬の選択、投与量等）を後方視的に調査し、介入前と比較検討した。